

じゃあ

早稲田大学教授
森山卓郎^{もりやま たくろう}

子どもたちが育っていく中でぜひとも大切にしたい「魔法の言葉」というものがあるとすれば、どんな言葉だろう。「ありがとう」「ごめん」はもちろん大切だ。感謝や申し訳なさを表したりすることは、人間関係の維持に欠かせないからだ。「ありがとう」の一言が、まるで春風のように心を温かくし、「ごめん」の一言が、つらく凍りついた心を溶かしてくれた、といった経験は、誰でもある。

しかし、私は「魔法の言葉」として、「じゃあ」を第一に挙げたい。以前、ある幼稚園でこんな光景を目にした。ブランコにずっと乗っている子どもがいる。すぐ傍にもう一人幼児がいて、「かーわって」と何度も連呼して

いる。無視して乗り続ける幼児と、壊れたレコードのように「かーわって」を繰り返す幼児。どちらも年長児くらいで、何か話ができそうなもののなのに、そこに交流はない。やがて待っていた子はあきらめて去っていき、乗っていた子もぐいとどこかへ行ったのだった。もしここに「じゃあ」があればどうなったか。「じゃあ」をきっかけとして、何らかの進展があったはずだ。「じゃあ、あと何回?」というように「交渉」が生まれることもあるだろう。「じゃあ、宇宙まで行ったら交替」なんていうめちゃくちゃな回答でも、少なくともそこから「やりとり」が生まれる。そもそも「じゃあ」は、「それ」で「は」 というように、何かの状況を受

け入れ、それに対応して「次」へ移るという接続表現だ。「じゃあ」がある限り、次がある。まさに魔法の言葉だ。子どもたちの育ちの中で、さまざまに「じゃあ」を使ってほしいな、と思う。「じゃあ、〜ということ?」のような相手の思いの確かめ、「じゃあ、いいよ」のような相手の受け入れ、そして、「じゃあ、こっしよう」というような状況に応じた提案。感情的にこじれた場合でも、「じゃあ、どうしたいの?」で、解決へ向けた話し合いができる。失敗したときも、「しかたがない。じゃあ、どうしたらいいか」というように、現実的で前向きな対応が考えられる。そして、この言葉はお別れの挨拶にもなる。——じゃあ!